

固有名と「詩の贈与」

— O. マンデリシタームの詩篇「戻り給え、血を濁す懷に」の読解 —

齊 藤 毅

1. 固有名, 伝記, テクスト

本論では、O. マンデリシタームの一詩篇の読解を通じて詩と固有名の関係について考えてみたい。詩のテキストのあり方と、人間の固有名のあり方には、どのような関係があるのか。この問題は、文学研究においてこれまで繰り返し話題にされてきた「詩と〈詩人の伝記〉の関係」という問題と関わっている。なぜなら、文学作品のテキストと、それを書いた人の伝記とは、テキストに付された署名、つまり固有名によってこそ媒介されると考えられるからである。

たとえば「詩人オーシプ・マンデリシターム (Осип Мандельштам) はユダヤ人であった」という文章を考えてみよう。この文章には、ある種の冗長性が見られる。なぜなら、マンデリシタームという姓はロシア系ユダヤ人に特有のものであり、彼がユダヤ人だということは、その固有名の中にすでに標記されているからである。Осип は旧約・新約聖書の中に多く見られるユダヤ人の名「ヨセフ」がロシア化したものであり、一方、Мандельштам はドイツ語の「Mandel あめんどうの木」、および「Stamm 幹」からなる姓で、イスラエル十二部族の一つ、レビ族のアロンの逸話と結びついている。¹ 人類学者 C. レヴィ＝ストロースの言うように、人間の固有名は、動植物の学名と同じように、多かれ少なかれクラス分けの機能を果している。彼はこうした固有名のクラス分け機能を「範列関係機能」とも言っているが、それは、固有名の意味を読み取るためにはそのためのコードを知っていなければならないことを意味する。² 実際、「マンデリシターム」がユダヤ人であることが分かるためには、ロシアあるいは広くヨーロッパにおける固有名のコードを知っている必要がある。

レヴィ＝ストロースはまた、固有名とは種のクラス分けの最終レベルであるとも言っている。それは固有名のクラス分け機能が、個体にいたるまでの種の類別化の機能であることを意味する（彼の「種としての個体」という表現を参照）。³ だからこそ、固有名は戸籍謄本などに見られるように人間の身元証明 (identity) の最も重要な契機となるのだ。ここから「詩人マンデリシターム」

固有名と「詩の贈与」

(＝マンデリシタームは詩人であった) という言表も可能になる。一般に「伝記」とは、個体としての人間をその固有名によって類別する諸関係が働く、等質的な空間および時間における、人間の生の記述 (bio-graphy) といえる。ここでは、こうした諸関係を仮に「〈伝記〉的諸関係」と呼ぶことにしよう。

マンデリシタームは「話し相手について О собеседнике」(1913) という文章の中で詩を投瓶通信に喩え、詩は無限の空間的・時間的距離を隔てた「後世の読み手」に宛てられた手紙のようなものと述べている。「航海者は危機が迫ると、自分の名 (имя свое) と運命を書き留めたものを瓶に詰め、封印して大洋の水の中に投げ込む。長い年月が経って、砂丘を放浪している私が、砂の中にその瓶を見だし、出来事の起こった日付、死者の最後の意思を知る」(強調は引用者)。⁴ ここでも固有名 (詩のテキストに付された署名と考えてよい) の意義が強調されているが、その機能の仕方は先に述べたのとは少し異なっている。なぜなら、投瓶通信としての詩のテキストのあり方は、「伝記」的諸関係を離れた、とりわけ詩人の死後にも生じうる人間の諸関係を前提としているからである (「死者の最後の意思」という表現を参照)。詩はそれが書かれている時点ですでに未一來の読者に宛てられているのであり、そのとき「伝記」的諸関係の働く次元とは異質な次元が分離され、詩はその次元で成立するのだと考えられる。「危機が迫るとき в критическую минуту」とは「分離のとき」でもあるのだ (ギリシア語の krinein は「切り離す」を意味する)。

つまり固有名は、「伝記」的諸関係の働く次元と、詩の成立する次元との接点としてあるのだと考えられる。固有名のこうしたあり方を考えるために、以下マンデリシタームの詩篇「戻りたまえ、血を濁す懐 (ふところ) に Вернись в смесительное лоно」の読解を試みたい。この詩はまさに「固有名」を中心的モチーフとしており、またそのテキストのあり方は、詩と固有名の関係を考えるとき、範例的なものと思われるからである。

Вернись в смесительное лоно,
Откуда, Лия, ты пришла,
За то, что солнцу Илиона
Ты желтый сумрак предпочла.

戻りたまえ、血を濁す懐に
レアよ、おまえが生まれたその懐に
おまえはイリオンの太陽よりも
黄いろの暗がりを好んだのだから

Иди, никто тебя не тронет,
На грудь отца в глухую ночь
Пускай главу свою уронит

行け、誰もおまえをかまいはしまい
静まった夜のなか、父の胸のなか
おのれの頭 (かしら) を沈めるにまかせよ

斉藤 毅

Кровосмесительница-дочь.	血を濁す女，その娘は
Но роковая перемена	しかし宿命的な変化が
В тебе исполниться должна:	おまえのうちで成就されねばならない
Ты будешь Лия — не Елена,	おまえはレアになるのだ——ヘレネーではなく
Не потому наречена,	そう名づけられるというのも
Что царской крови тяжелее	王家の血が他の血よりも
Струиться в жилах, чем другой, —	血の管を流れ難いからではなく——
Нет, ты полюбишь иудея,	そうではなく，おまえはユダヤの男を愛し
Исчезнешь в нем — и бог с тобой.	彼のなかへ消えゆくのだ——そして神はおま
1920 ⁵	えとともに

この詩は、1921年に詩人の妻となったユダヤ人の女性ナデジダ・ハージナ（Надежда Хазина）に献げられたものとされており（献辞はない）、同様にハージナに献げられた詩人の第2詩集『第二の書 Вторая книга』（1923年にモスクワで刊行。後に『Tristia』と改題）に収められている。詩人とハージナは1919年3月にキエフで出会い恋仲となるが、内戦の混乱で一年半の別離を強いられた。詩人がこの詩を書いたのはこの時期のことである。⁶しかし、こうした「伝記」的事実から、詩における「おまえ」はハージナを指すと結論することは、ここではあえてしない。もしそうなら、詩の献呈という贈与は「伝記」的諸関係の中だけでの出来事となるだろう。今問題となっているのは、詩と「後世の読み手」（ハージナも含まれる）との関係であるから、ここでは「おまえ」を、この詩に接しうるあらゆる人と考えることにする。

以下、読解の際の道標となるのは、テキストの構成の軸をなす次の2つのモチーフである。①固有名のモチーフ：レア／ヘレネーという名の対立，およびそれに対応するユダヤ（『創世記』におけるユダヤの民）／ギリシアの対立。②「血 кровь」のモチーフ：インセスト（кровосмесьство）／王家の血筋（царская кровь）の対立。これもユダヤ／ギリシアの対立と対応している。⁷

2. 命一名における贈与と負債

詩の前半2連は「おまえ」に対する3つの命令文から成っており、第3連冒頭に当為を示す文が続いた後、未来時制による断言的な文が2つ続く。前半の

固有名と「詩の贈与」

命令は全体としてインセストの禁止を侵犯せよとの要請といってよい。実際、この2連全体はインセストの指標によって縁どられている（第1行：в смесительное лоно, 第8行：кровосмесительница）。そして同時にそれは「おまえ」の命名としての効果を持っている。2行目の「おまえ」（女性）に対する「レアよ」という呼びかけのことである。この詩において「おまえ」はまだ「レア」ではない。第3連冒頭に「おまえのうちで宿命的な変化が成就されねばならない」とあり、コロンの後に「おまえはレアになるのだ」と続くように、「おまえ」は「レア」と命名されるべきなのであり、侵犯への命令および「レア」の命名は、ここでは同じ一つの所作のもとで行われるのである。こうして血のモチーフ（インセスト）と固有名のモチーフ（命名）が結びつく。

では、この命名の行為は具体的にどのような効果を生むのか。「レア」という名は、固有名の「範列関係機能」によりある親族関係（кровь）、つまり『創世記』に語られるユダヤの民の親族関係を暗示する。レアは妹のラケルと共に族長ヤコブの叔父ラバンの娘であり、ヤコブの最初の妻となった女である。ヤコブは当初ラケルと結婚するはずだったが、ラバンの計略により先にレアと初夜を過ごしてしまい、レアは彼の子を身ごもる（29-30章）。このように、固有名はある範列関係（ここでは親族関係：レア＝ラバンの娘＝ラケルの姉＝ヤコブの妻……など）の中で意義を持つため、その諸関係によって形成される歴史（ここでは一般に『創世記』の「族長物語」と呼ばれるもの）をも含意するようになる。これは先に定義した「伝記」の変種といえる。しかし、それが「伝記」と異なるのは、それが幾度となく引用され、様々なコンテクストと結びつけられてきたために、そこにおいて固有名は本来の範列関係から離れ、なかば普通名詞（common noun）、つまり共有された名詞となっていることである。この点で重要なのは、聖書解釈学の伝統においては、妹のラケルは容姿は優れていたが、子に恵まれなかったのに対し、姉のレアは子を多く産んだことから、ラケルは観想の象徴、レアは創造の象徴として扱われてきたことである（有名な例はダンテ『神曲』「浄罪篇」27歌の一節）。⁸

こうして「おまえ」は「レア」と名づけられることにより、レアが属する範列関係（ユダヤの民の親族関係および歴史）の中に引き込まれ、さらに普通名詞としての「レア」が持つ、創造の象徴という意義を担うことになる。このように創造（産むこと）の意義を持つことによって、「レア」の名は第1行の«лоно»という語と関係づけられる。この語は内部への運動を示す前置詞«в»と結合しているため、「子宮」の意味を持ちうるのである。⁹したがって、この詩

齊藤 毅

における創造とは、インセストの禁止を侵犯するような形で起こる、何ものかの生誕なのだと考えることができる。

ともあれ、詩における命名は「おまえ」を一定の範列関係の中に置くものである以上、彼女に固有性を与えるよりも、彼女自身の固有性を否定するように働いている。第1連、2連の冒頭にそれぞれ「戻れ」「行け」とあるように、彼女は今ある位置を離れるよう要請されているのだ。しかし「彼女自身の固有性」とは何だろうか。レヴィ＝ストロースの考えに従うなら、固有名の機能とは個体にいたるまでの種のクラス分けであり、その意味では普通名詞の機能と同一である。つまり固有性とは固有名 (proper name) に内在するものではなく、固有名の私有化 (appropriation) (ある種の民族に見られる名のタブーなど) という操作によって生じるのだ。¹⁰ そして、固有名によって類別された人間が「伝記」的諸関係の中に占める位置を、その人「固有」の位置というのなら、それは実際は他者から与えられたものである。たとえば、子が両親から生まれたとき、その子にはまず名が与えられ、この固有名の機能によって、子は親族関係をはじめとする人間の諸関係の中に位置を占める。このとき、人はけっして自分を命名することができない。

ここで命名における贈与という契機が問題になる。固有名は他者からしか与えられないという意味では、命名は贈与の行為である。しかし、実際は子の生誕という贈与が先に起こっていることに注意しなければならない。すでに親族関係の中に位置を占めている者にとっては、子の生誕とはこれまで存在しなかった何ものかの出現であり、それが命名を促す最初の贈与なのである。したがって、一面では固有名は生誕という贈与の印 (記一念) である。しかし同時に、命名の行為は、その子を固有名の範列関係の中に位置づけ、個体として同定 (identify) 可能にすることで、贈与という出来事を忘却させるのである。

一方、詩においては「おまえ」の命名こそが、最初になされる贈与であり、これまで存在しなかったものの出現である。このことを詩のテキストに沿って見てみよう。第3連では「おまえはレアとなるのだ——ヘレネーではなく、というの……」と告げられる。この文は「レア」の名を示すと同時に、この名が関与するテキストのトーンをも伝えている。「おまえはAではなくBになる、なぜなら……」という統辞上のパターンは『創世記』における神ヤハウエの言葉の模倣のように思える。

今後君の名をアブラムと呼ぶのはやめて、アブラハムと呼ぶことにしなさい。とい

固有名と「詩の贈与」

うのは、わたしは君を多くの国民の父とするからだ。

И не будешь ты больше называться Аврамом; но будет тебе имя: Авраам; ибо Я сделаю тебя отцом множества народов. (創世記 17:5 — 下線は引用者)

その人が言うには、「もう君の名をヤコブと呼ぶのはやめて、イスラエルと呼びなさい。君は神と人との戦を挑んで勝ったからだ」。

И сказал: отныне имя тебе будет не Иаков, а Израиль; ибо ты боролся с Богом и человеков одолевать будешь. (創世記 32:29)¹¹

これはヤハウェがアブラムおよびヤコブに別の名前を与えることで族長の役割を命ずる、『創世記』の中でもきわめて重要な場面（聖書学で言う「族長への約束」）の言葉である。彼らは生まれたときに親から名（アブラム、ヤコブ）を与えられ、それによって親族関係の中に位置を占めるようになったわけだが、さらに神から名の贈与を受けることになる。神からの贈与は、親族全体をある目的、親族の中の諸関係を越えた目的へと導く使命を彼らに与える。ここでは「使命」を「負債」と言い換えることもできる。詩の第3連には「宿命的な変化が成就されねばならない（должна）」とあるが、この должен という当為を示す述語が「負債 долг」に由来するのは言うまでもないだろう。人類学者 M. モースの『贈与論』によれば、人間の経済の原初形態は、交換ではなく贈与であった。贈与は相手に対して負債の感覚を生み、彼は返答つまり反対贈与を行うことでこの感覚を解消する。¹²『創世記』の例でいえば、神からの名の贈与が負債＝使命の感覚を生むのであり、その負債は「アブラム／アブラハム」の差異のうちに刻印されることになる。

詩においても「おまえ」が「レア」という名の贈与を受けることは、ある負債＝使命を負うことを意味する。その返答として、彼女は自分が今ある場所、自分の固有名が属する諸関係を越えなければならない。『創世記』における超越神ヤハウェの命一令（命一名）が、これまで人間の諸関係の中に存在しなかったものの出現、つまり贈与だとするならば、彼女はいわば「神」との関係の中にあるのだと、隠喩的に言うこともできるだろう。詩の終わりには「そして神はおまえとともに и бог с тобой」とある。これは口語的なイディオム（「どうにでもなれ」といった意味）であるが、ここでもそれは『創世記』の「族長の約束」の場面においてヤハウェから発せられる言葉（聖書学で言う「神の共在」）と呼び交わしているように思える。

ヤハウェがイサクに現われて言われるのに「〈…〉この地に客として宿れ。そうす

齊藤 毅

ればわたしは君とともにあり (Я буду с тобою), 君を祝福する。」(創世記 26:2-3)

「わたしは君 [ヤコブ] の父アブラハムの神, イサクの神なるヤハウェである <…>
見よわたしは君とともにあり (И вот, Я с тобою), 君の赴くすべての所で君を守り,
ふたたびこの地に君を導き返すであろう。」(創世記 28:13-15)

3. 血一筋, 言語, インセスト

このような「神」との関係の中で「おまえ」はユダヤ人レアとなり、「ユダヤの男を愛する」ことでインセストの禁止を侵犯し、何ものかを産みださねばならない。しかしインセストは何を創造するのか。詩における血のモチーフは、創造とどのように関係しているのか。すでに述べた通り、このモチーフは「インセスト／王家の血筋」の対立のうちに示されており、さらにこの対立は「レア／ヘレネー」の対立と呼応している。

この固有名の対立は、第1連の「黄いろの暗がり／イリオンの太陽」という対立と対応している。「イリオン」はトロイアの別名で、ホメロスの『イーリアス』の題名の由来もそこにある。ヘレネーが、そこで物語られるトロイア戦争のきっかけとなった、スパルテーの王妃であることは言うまでもない。ただ、より正確にはトロイアは小アジアの一地方の名であり、イリオンはその地方の城市の名なので、「イリオンの太陽」というとき、その都市国家としてのあり方が強調されていることに注意しなければならない。「太陽」は、王 (царь) を中心とした都市国家の求心的なあり方を示している。

一方、「黄いろの暗がり」、太陽とは対照的なこの無定形な暗がりは、『創世記』において放浪するユダヤの民のあり方を示しているように見える。実際、アブラハムは神の導きにより、これまで暮らしていた都市、親族関係を捨て、カナンカナンの地へと旅立つのだ (創世記 12:1 — 「さあ、君の国、君の親族、君の父の家を離れて、わたしが君に示す国へ行きなさい」)。「黄いろの暗がり」が示している「黒—黄 черно-желтый」の色は、ユダヤ教の朝の祈禱の際、男が肩に掛けるタリスという布の色である。マンデリシタームの他の作品でも、この色彩はユダヤ人のモチーフとの関係で度々用いられているが、同時にインセストのモチーフと結びつけられる場合もあり、とくに『第二の書』所収の詩では、日蝕の太陽を指す「黒い太陽 черное солнце」の形象をとっている (ちなみにこれは福音書のイエスの死の箇所、あるいは『黙示録』など、新約聖書

固有名と「詩の贈与」

における「危機」的な情景に現れる形象である)。¹³「黄いろの暗がり」も、「太陽」と対比されていることから、この「黒い太陽」の変種とみなすことができるだろう。「おまえ」は「黄いろの暗がりを好んだ」がゆえに、インセストを犯さねばならないのだ。

インセストへの具体的な命令は第2連にある。しかし「父の胸のなかにおのれの頭を沈める」娘というのはレアには当たらない。実際、この命令は三人称命令文の形で書かれている。『創世記』でこのような父と娘のインセストを犯すのは、よく知られる通り、族長アブラハムの甥であるロトの娘たちである。ソドムの滅亡から難を逃れ孤立した彼女らは、子孫を絶えさせないようにと父と寝る(19:30-38)。このレアとロトの娘の結びつきには、フロイトが言う圧縮と置き換えによる「夢の作業」のようなものが働いている。「おまえ=レア」、つまりおのれの固有名の範列関係を捨てた「おまえ」、および普通名詞となった「レア」は、すでに自己同一性(identity)を持ちえないのである。まず、ロトの娘たちもラバンの娘レアとラケルも二人姉妹である。そして、この2組の姉妹の物語には、第6行にある「静まった夜」、この太陽の不在による闇に紛れて奸計が行われるという共通点がある(дочьとночьは韻を踏んでいる)。ロトの娘の場合は父とのインセスト、レアの場合は妹より先にヤコブと寝ることである。さらに、詩では「娘」の固有名は示されていないが、『創世記』のテキストにおいても同様である。¹⁴

詩のテキスト構成に従うなら、「黄いろの暗がり／イリオンの太陽」の形象を血のモチーフと結びつけているのは、第4連冒頭の「王家の血筋 царская кровь」という部分である。¹⁵ 都市国家がそれとして存続するためには、王家の血筋が保たれなければならない。ここで「血筋 кровь」という概念は逆説的なあり方をしている。それは生物学的な自然に依拠していながらも、固有名の範列関係のような、言語的關係を実体としている。たとえば「王家の血筋」は「太陽」たる王=父を中心に、王妃=母、王子=息子……というように、範列関係として規定される(この点で第6行におけるユダヤの「父」と「夜」の並置は対照的である)。そして、この生物学的な「血」から言語的な「血筋」への移行の契機となるのがインセストの**禁止**である。¹⁶ インセスト・タブーとは、一定の婚姻を禁止することによって、親族関係のうちに内部と外部の線を引き、一本の「血一筋」を出現させることだと言えるだろう。ここには血筋と都市の対応関係が見られる。都市(город)とは、大地を囲い(ограда)によって分割することで、内部と外部の線引きをすることだからである。¹⁷ こうして最初

齊藤 毅

に禁止があった。「血を濁すこと кровосмесьство」という言い方は、まず「血筋」があったことを前提としているが、実際は禁止によってこそ、「血筋」は生じたのである。そして、「血筋」とは言語的關係であるのだから、その契機となるインセストの禁止は、言語活動と同じものだと考えられる。

以上を、引き続きテキストの構成に従って見てゆこう。第3連では最初の行が「роковая», 最後の行が「наречена」という語を含んでいる。нареченаは命名行為を表す動詞 наречьの形動詞であり（この古文体の言葉は『創世記』のロシア語訳において登場人物が生まれ命名される際の「名づける」という言葉の訳語として使われている）,¹⁸ 動詞 речьから派生したものである。一方、形容詞の роковойは рок（宿命）から派生したものである。そして、речьと рокは同じ語源、つまり「言葉を発する」ことを意味する祖スラヴ語の *rekti に由来する。「すでに言葉にされていること」というのが「宿命 рок」の原義である。¹⁹ つまり第3連は「言葉」の指標に枠づけられているわけだが、さらに「кровосмесительница」（第8行）と「царской крови」（第13行）という血のモチーフに関わる語がこの連を外側から囲んでおり、一方は放浪する民のインセストを、一方は都市国家の「血筋」を示している。こうして「言語」と「血」の指標がシンメトリックに配列され、この枠の中に詩の中心となる詩行「おまえはレアとなるのだ、ヘレネーではなく」が位置する。したがって、この部分は両端から中心に向かって「血→言語→固有名」というモチーフの配置があることになるが、これは「インセストの禁止→〈血筋〉における言語的關係→固有名の範列関係」という流れと対応している。そして、インセストの禁止および「血筋」と、言語活動との関係は、「КРОВЬ」/「РОКОВАЯ」という綴り替えのうちに示されている。「血筋」のうちには、すでに言語の刻印が穿たれており、固有名とは「血筋」に内在する言語活動の現れなのである。

こうした「血→言語→固有名」の流れの中に「おまえ＝レア」と「ヘレネー」を位置づけるなら、次のようになるだろう。ヘレネーはイリオンへ略奪され、トロイア戦争の原因となる。こうした戦争が起こるためには、「血筋」（царская кровь）の言語的關係が都市国家（Илион）の基盤となり、そこにおける固有名的な範列関係（Елена）に従って人間の位置（王、王妃など）が明確に定まっていなければならない（血→言語→固有名）。一方、「おまえ」はこれとは逆の運動の中にある。都市国家イリオンと対比されるユダヤの民の放浪は、アブラハムがヤハウエの命令に従い、「おのれの国、おのれの親族を離れ」たときに始まる。同様に彼女も詩における命令に従い、自分の固有名を捨て、

固有名と「詩の贈与」

ユダヤ人「レア」になるという「宿命的な変化 роковая перемена」（命運に関わる、それと同時に血と言語に関わる移行）を成就し、「ユダヤの男を愛し」「血を濁す娘」となる（固有名→言語→血）。これはインセストの禁止の彼岸へ赴くこと、言語的諸関係に解消される以前の、人間の生誕という贈与（「子宮 лоно」に象徴される）の方へと接近（Вернись）することである。

4. テキストと読み手 ― 固有名から詩の贈与へ

インセストの禁止を侵犯することで生誕という贈与の契機に向かうこと、これが「レア」となった「おまえ」の負う使命なのだと言える。先に触れたように、生誕という贈与の契機は、なによりも固有名によって印づけられるものであった。このことは、その固有名を与えられた人が故人である場合を考えれば、よりはっきりするだろう。出来事は、言語によらなければ、永続的に印づけられる（記一念される）ことはないのだ。しかし、詩の中の「おまえ」は固有名を捨てることで、この出来事に接近する。なぜなら、固有名は一方で人間をすでに存在する諸関係の中に位置づけることで、贈与という出来事を忘却させるからである。

これは矛盾した状況のように見える。しかし、注意しなければならないのは、「おまえ」は他者との関係の中にあること、つまり『創世記』におけるヤハウェのような他者から命令を受けていることである。他者の命令とは詩のテキストそのもののことである。このテキストは、それ自体が全体として「おまえ」への命令を形づくるように構成されているのである。だから、詩における「おまえ」はこのテキストの読み手以外のものではないだろう。ここから次のことが帰結する。まず「おまえ」が詩の命令に従うということは、読み手が詩のテキストをこれまで存在しなかったものの出現、つまり贈与として受けとめることを意味する。このときテキストに付された署名、つまり作者の固有名は言わば「ヤハウェ」の名のように贈与の印をとり戻す。なぜなら作者のテキストは、固有名が贈与を忘却させるように機能する「伝記」的諸関係を離れた次元において、呼びかけるべき「おまえ」を見いだすからである。しかし読み手がテキストを「伝記」的諸関係の中に位置づけ、そのコンテキストの中でそれを読み始めるや否や、作者の署名は個体の類別機能を担う「固有名」となる。

こうした固有名の2つのあり方は、もっぱらテキストに対する読み手の関係に拠ることが分かるだろう。作者は、固有名を持つ生きた人間としてでなけれ

齊藤 毅

ば、つまり「伝記 bio-graphy」的諸関係のうちでなければ、テキストを書くことができない。そのテキストが贈与となるためには、そうした諸関係を越えた他者、「おまえ」との関係が必要なのである。そのとき「おまえ」は、テキストの命令に従うことで「伝記」的諸関係を離れ、おのれの固有名を失って「レア」となり、テキストとの関係の中に「消え исчезнуть」なければならない。しかし、同時にそのときこそ「レア」となった「おまえ」によって、贈与の印としての作者の署名が産みだされるのだといえるだろう。²⁰

以上をまとめよう。詩を「詩人の伝記」との関係で考える場合、詩人の伝記の軸となっている詩人の固有名と、詩のテキストに付されている詩人の署名、この二つの機能の差異を考察することが不可欠である。人間は生誕し、固有名を与えられることで、「伝記」的諸関係の中に位置づけられる。そこでは固有名は、この諸関係における人間の位置を同定する機能を果たすため、あたかも最初から存在していたものであるかのように、自明なものとして扱われる。「伝記」とは固有名のこうしたあり方に依拠した人間の生の記述といえる。一方、詩のテキストは「伝記」的諸関係を離れた読み手（マンデリシタームの言う「後世の読み手」）との関係、詩人の死後にも生じうる「おまえ」との関係を原理的に前提としている。この関係の中で作者の固有名（署名）は、「伝記」的諸関係の中では忘却されていた贈与の印というあり方を取り戻すのである。

こうしたことは詩が「書かれたもの письмо」であるからこそ可能になるのである。実際、伝記、固有名（署名）、詩、禁止（法）などはすべて「書かれたもの」というあり方をとっている。したがって、本論で考察した事柄の諸連関を「書かれたもの」という主題のもとに再編成し、再考することが可能であるし、またそうすべきであることを、最後に述べておきたい。

（さいとう たけし・東京大学）

注

- ¹ Pollak, N. *Mandelstam the Reader*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1995. 34. アロンの逸話については『民数記』17章を参照。
- ² C. レヴィ＝ストロース『野生の思考』大橋保夫訳、みすず書房、1997、241-44。レヴィ＝ストロースの固有名論については、同書第6章、およびとりわけ第7章「種としての個体」（229頁以下）を参照。また、R. ヤコブソン「転換子と動詞範疇とロシア語動詞」、『一般言語学』川本茂雄監修、みすず書房、1989、150-51も参照。
- ³ レヴィ＝ストロース、258。

固有名と「詩の贈与」

- ⁴ Мандельштам, О. *Сочинения в двух томах*. Т. 2. Сост. П. М. Нерлела. М.: Художественная литература, 1990. 234-35.
- ⁵ Мандельштам, О. *Полное собрание стихотворений*. (Новая библиотека поэта.) Сост. А. Меца. СПб.: Академический проект, 1995. 149.
- ⁶ この経緯については Мандельштам, Н. *Вторая книга*. М.: Московский рабочий, 1990. 18-25, 193-94 を参照。なお、この別離の時期に詩人がナデジダに宛てた手紙 (1920 年 12 月 5 日付) が残っている。
- ⁷ この詩篇に言及している研究としては, Ronen, O. "Osip Mandelshtam." *Encyclopedia Judaica Yearbook 1973*. Jerusalem: Keter, 1973. 296; Taranovsky, K. *Essays on Mandelstam*. Harvard: Harvard UP, 1976. 59-63; Isenberg, C. *Substantial Proofs of Being: Osip Mandelstam's Literary Prose*. Columbus: Slavica, 1987. 29-30; Freidin, G. *A Coat of Many Colors: Osip Mandelstam and his Mythologies of Self-Presentation*. Berkeley: U of California P, 1987. 124-31; Cavanagh, C. *Osip Mandelstam and the Modernist Creation of Tradition*. Princeton: Princeton UP, 1995. 124-45 などがある。
- ⁸ Тарановский, К. "Три заметки о поэзии Мандельштама." *International Journal of Slavic Linguistics and Poetics* 12 (1969): 169-70. ダンテの該当箇所は以下の通り。「私の名はリーア, 自分のために美しい花環を編もうと美しい手を動かしながら私は行く, <...> 私の妹ラケールはその鏡の前を離れず終日そこに座っている」(101-05 行) (『ダンテ』野上素一訳, 『世界古典文学全集』35, 筑摩書房, 1964, 202)。
- ⁹ Freidin 330.
- ¹⁰ 固有名の非固有性, そして固有名の「私有化」については, レヴィ＝ストロースの他に, J. デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて』上, 足立和浩訳, 現代思潮社, 1990, 第2部第1章「固有名詞の諍い」(219 頁以下) を参照。この項はレヴィ＝ストロースの固有名に関する考察 (とくに『悲しき熱帯』における) の検討という形をとっている。
- ¹¹ 旧約聖書からの引用は, 『創世記』関根正雄訳, 岩波書店, 1980; Библия. Синодальное изд. 1985. М.: Протестант, 1991 による。
- ¹² М. モース「贈与論——太古の社会における交換の諸形態と契機」, 『社会学と人類学』1, 有地亨他訳, 弘文堂, 1985, 226-29.
- ¹³ 『第二の書』に限るなら, 「黒い太陽」の形象がユダヤ人のモチーフと結びついている詩は, «Эта ночь непоправима...» (1916), «Среди священников левитом молодым...» (1917), インセストのモチーフと結びついているものは, «Как этих покрывал и этого убора...» (1915) (ラシーヌの悲劇『フェードル』に題材を得たもの) がある。マンデリシタームにおける「黒い太陽」の形象に関する先行研究, およびより全般的な考察については, 斉藤「フェードルとイポリートの詩 (O. マンデリシターム

齊藤 毅

- «Tristia» 読解のまえに)」、『SLAVISTICA』11 (1995) : 345-66 を参照。
- ¹⁴ このレアとロトを結びつける解釈については、Мандельштам, Н. 193 を参照。
- ¹⁵ タラノフスキイはこの部分を「ダビデ王の息子たちの血筋」と解釈しているが (Taransky 60), 詩における「ユダヤ人のモチーフ」はもっぱら『創世記』の「族長物語」に属するものであるゆえ、「王家の血筋」はギリシアの都市国家のあり方と関係させるのが妥当と思われる。
- ¹⁶ R. ジラール『暴力と聖なるもの』古田幸男訳, 法政大学出版局, 1996, 第9章「レヴィ=ストロースと構造主義と婚姻の法則」(353 頁以下)。レヴィ=ストロースがインセストの禁止を負の法則と見なし, 女性を他者に与える贈与の法則が正の法則であると考えたのに対し (『親族の基本構造』下, 馬淵東一他監訳, 番町書房, 1978, 832), ジラールはインセストの禁止のうちに, 一切の親族関係を組織する積極的な契機を見いだしている。
- ¹⁷ この問題については, 齊藤「民の声, 詩人の眼差し — О. Манделиштамの戦争詩より」, 『スラヴ研究』44 (1997) : 97-114 を参照。
- ¹⁸ 一例は, 「そこでその名をヨセフと名づけて (и нарекла ему имя: Иосиф) 言った, 『ヤハウエがわたしにさらに他の子を加えて下さるだろう <…>」 (創世記 30 : 24)。
- ¹⁹ Цыганенко, Г. *Этимологический словарь русского языка*. Киев: Радянська школа, 1989. 356-57, 360; Фасмер, М. *Этимологический словарь русского языка*. Т. 3. М.: Прогресс, 1967. 496.
- ²⁰ タラノフスキイは, Манделиштамのこの詩と, S. マラルメの詩「詩の贈与 Don du Poème」(1865) および И. Анненскийによるそのロシア語訳 «Дар поэмы» (1898) との間の形象上のいくつかの類似点を指摘している (Taransky 63)。それについてここで詳しく検討することはできないが, 夜が産んだ娘 “l'enfant d'une nuit d'Idumée” である詩を, 乳母たる「おまえ」(読者) に委ね, その生誕を迎えて “accueille une horrible naissance” くれるよう願うマラルメの詩は, 全体としてМанделиштамの詩と同じ情景を示しているように思える (Mallarmé, S. *Œuvres*. Ed. Y.-A. Favre. Paris: Ed. Garinier, 1985. 43)。

Такэси САЙТО

**Имя собственное и «дар поэмы»:
Анализ стихотворения О. Мандельштама
«Вернись в смесительное лоно...»**

В этой статье содержится анализ стихотворения О. Мандельштама «Вернись в смесительное лоно...» (1920); на примере этого стихотворения рассматривается функция имени собственного в поэзии. Здесь под словом «имя собственное» я

固有名と「詩の贈与」

подразумеваю не только имена в тексте, но и подпись самого автора (имя поэта). Сам Мандельштам подчеркивает значение последнего в своей статье «О собеседнике» (1913).

В общих функциях имени собственного человека можно различить два главных момента. С одной стороны, по мнению французского антрополога К. Леви-Стросса, имя собственное является «последней степенью классификации рода». В применении к человеку это значит, что имя собственное служит определению положения человека, как личности, в разных отношениях (семейном, государственном и т.д.). Можно утверждать, что личная биография опирается на эту функцию имени собственного. С другой стороны, имя собственное играет роль ознаменования «дара» (я определяю «дар» как появленце того, чего еще не было), т.е. рождения человека. Мое предположение заключается в следующем: в биографии (например, биографии поэта) главную роль играет первая функция, а в поэзии — вторая (в данном случае функция подписи поэта). И этот переход функций из одной в другую совершается в отношениях между автором и читателем (по выражению Мандельштама «читателем в потомстве») посредством текста.

Весь текст стихотворения «Вернись...» построен, главным образом, на использовании форм повелительного наклонения 2 лица ед. числа (я полагаю, что «ты» — обращение к «читателю»). Говорящий в тексте требует, чтобы «ты» была «Лия» (первая жена Якова в «Бытии») и вернулась в «смесительное лоно» — т.е. исполнила акт кровосмешения. Имя «Лия» дано в сопоставлении с именем царицы Спарты Елены из «Илиады», которую перевезли в Трою как «солнце Илиона». Здесь связь образов разворачивается следующим образом: 1) «Елена» — «солнце Илиона» (структура города, в центре которого царь как «солнце») — «кровь» (порядок родства); 2) «Лия» — «желтый сумрак» (блуждающие иудеи, не имеющие своей страны) — «кровосмешение» (разрушение порядка родства). Кроме того, в традиции экзегетики «Лия» считается символом творения (и отсюда ее связь с «лоном»). Имя «Елена» воплощает отношения, в которых выявляется первая функция имени собственного. Между тем, элементы, которые символизирует имя «Лия», открывают возможность выйти за эти рамки отношений, как это сделал Авраам в «Бытии», бросивший свою «землю и родство» по приказу Яхве.

Читатель стихотворения, по воле автора текста, выраженной в соответствующих грамматических формах, также бросает свое имя собственное, которое исполняет первую функцию, и, став «Лией», воспринимает текст, как слова Яхве (и в самом деле, стиль стихов подражает его словам). И поскольку они носят характер «дара» в «Бытии», подпись поэта, которая завершает текст, исполняет вторую функцию имени собственного. В этом состоит значение «Лии» как символа творения, вызывающего явление «дара».